
東方飛翔機～幻想の神が現代入り？～

妬む男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方飛翔機〜幻想の神が現代入り？〜

【Nコード】

N6754V

【作者名】

妬む男

【あらすじ】

幻想郷に住む妖怪であり神でもある主人公、辰巳。八雲紫のスキマに落とされ、現代入りした。そこはインフィニット・ストラトスISが世界に普及し、女尊男卑が作り上げられた世界だった。現代入りした辰巳は、この世界を変えられるか？

ブローグ〜現代入り〜（前書き）

初めましての人は初めまして。前作を見ていた人はお久しぶりです。インフィニット・ストラトスに関してはアニメと二次創作ぐらいしかありませんが、どうか見ていってください。

プロローグ 現代入り

現代では幻想の存在とされている妖怪や神。

既に存在が失われているような者が集まる場所。

そこに住む者たちは、その場所をこう言う。

幻想の住まう郷、『幻想郷』と・・・

俺、妖怪であり神である存在『辰巳^{タツミ}』は幻想郷に住む神として毎日
を過ごしている。

住処である地底で、今日ものんびりと茶を啜っていた。

「・・・何の用事だ、八雲。」

「あら、ばれちゃった？」

そういつてスキマを開いて出てきたのは『八雲紫』。

1000年以上前からの友人である。

「実は、あなたとのことm「帰れ」酷いわね、友人になんてことを。」

よよよと泣きまねをする八雲を無視し、茶を片づける。

「もう一度聞く。何の用だ。」

「ええ。貴方、『外』に興味はある？」

彼女の言う『外』とは幻想郷の外であり、『現代』の世界の事である。

「・・・ああ、あるといえばある。」

「そう。それは良かった。」

「・・・何でそのような話をするんだ。」

「それを言ったら楽しくないじゃない」

扇子で口元を隠して笑う紫は、とても怪しげな雰囲気を出している。

「まあ、それを聞けたら十分ね。」

扇子を閉じてこちらに向かい合うように顔を向ける。

「いつてらっしゃい。辰巳。」

その瞬間、スキマに落とされていった。

「全く…面倒なことになりそうだ・・・」

無理やり送られたにも関わらず、内心喜んでスキマに落ちていく。

彼が送られた世界は女尊男卑、科学の発展した世界。

一人の女によって大きく変わった世界である。

そして、幻想の神は世界を変える。

『妖怪神』の名の下に。

主人公設定

名前 辰巳タツミ

性別・・・・・・男

身体年齢・・・15～17歳

実年齢・・・約4000歳

容姿・・・黒髪黒目。髪は肩より少し上まで伸びている。

身長・・・約170cm

能力・・・「伸縮を操る程度の能力」

解説・・・小町の距離を操る能力の進化版のようなもの。物やレーザーを伸ばしたり、人の将来性も伸ばせる。

種族・・・妖怪 『蛇帯』 通称「永遠に辿り着けぬ神」

専用機・・・『幻想』待機状態はビー玉ほどの大きさの陰陽玉。

3発攻撃を受けると墜ちるが、その分機動力と弾幕を張ることに長けている。

また、幻想郷での弾幕ごっこを再現できるほどのエネルギーがあり、スペルカードを再現することができる。なぜかスペルカードを使っている人のような服装等、特徴的なものが出てくる。（妖夢の半霊、魔理沙の箒など）

人間（？）関係・・・低（一部を除く）礼儀を大切にしているが、名前で呼ぶ事は少ない。

八雲紫、八雲藍、八意永琳、魂魄妖夢、四季映姫、博麗霊夢、水橋パルスイ、森近霖之助、藤原妹紅、上白沢慧音、紅魔館一同、地霊殿一同とは仲が良い。騒がしい人（霧雨魔理沙、チルノ、鬼一同、射命丸文など）は嫌い。妖夢や藍からはよく相談や愚痴を聞かされる。

基本はしっかりしたクールな印象。義理堅く、頼みごとや相談はし

っ
かり聞いてくれる良い人。
神としても仕事をこなすしっかり者。映姫曰く「小町に見習わせた
い」だそうだ。

第1話〜天才と妖怪〜（前書き）

基本書き溜めはしていない為、更新が遅れるかもしれませんが、ご了承ください。

第1話　天才と妖怪

スキマに落ちて約3分。

ようやく出口が見えた。開いたその先は機械の山。

機械に当たらないようにギリギリで飛び、浮いた状態にする。

「やあやあ、君がゆかりんの言ってた人かい？」

急に背後から声をかけられる。振り向くと、幻想郷の住人のようなメルヘンな服装に、頭にはウサ耳のついた女性が立っていた。

「急な訪問ですまないな。」

「いいよいいよ！しばらくは退屈しないだろうからね！」

笑顔で答える女性はとてもテンションが高く、少し陰悪感を感じる。実際にこういった奴らは基本うるさいため、鬱陶しいからイライラする。

「それじゃ、自己紹介といこうか！私は篠ノ之束！ISの製作者にして天才なのだー！」

「……………辰巳だ。」

やはり鬱陶しいな。

そう思いながらも、辰巳に束はISの説明をする。

「……………要するに、ISはスポーツの一種のようなもので、実際は宇宙服の代わりの為に作ったのか。」

「ま、そう覚えてもらえばいいよ。」

「・・・しかし、なぜか女にしか反応しない不良があつたのか。」

そう。ISは女にしか反応しない。

幻想郷の弾幕ごっこもやってるのはほとんど女だ。

俺も含めた一部の男は特別にやっている。

「でも、そこを除けば最高の出来なんだよね。」

つまり、女にしか使えないため、女尊男卑が出来た。

しかし、女の中でも適正というものがある為、使える人はほんのわずかである。

ISのコアも467個しかなく、当然機体も467体しかない。

「・・・なるほど。大体理解した。」

「わかったかい？だけど、一つ訂正があるよ。」

「・・・コアの数か。」

「正解！ゆかりんから頼まれてね。たっ君の専用機を作るからコアを1つ、特別に作ったんだよね。」

たっ君というあだ名は気に入らないが、まあ構わない。

専用機というのは、467しかない機体を自分専用として使えるので、実力のある人しか持たせられないものである。

「コア…つまり、機体は出来ていないと。」

「うん。君の要望は大体出来るようにするからね。どんなチートでも構わないよ！」

つまり、慣れている弾幕ごっこのような感じでも出来るという事か。

「……………そうだな。それでは……………」

こうして専用機の開発が始まった。

専用機の特徴を簡単に説明すると

○速度と弾幕用のエネルギーを大半にし、スペルカードを模範とした武装で弾幕を作る。

○シールドエネルギーはなく、3回攻撃を受けると落ちる。

○弾幕によるエネルギー切れはない。

○形体を変えることによって弾幕を変えられる。

という物ができた。

そして、2年の月日が経った…

「じゃ、IS学園に入学する手続きは終わったから、いってらっしゃい」

「……………世話になったな。」

辰巳がIS学園に入学する。それと同時に、原作が始まる。

2人の男が入ったIS学園。
イレギュラー

ここから世界が大きく変わることになるうとは、この時、誰も知らなかった……

第2話〜学園と妖怪〜（前書き）

今回すごくキリが悪いです………

そして今日と昨日だけでPV1000とユニーク300突破…

正直めちゃくちゃうれしいです。目指せ10万！無理だろうけどね

ww

第2話　学園と妖怪

IS学園に到着した辰巳は、しばしストレスに苦しめられた。

それもそのはず。ISは女性にしか反応しないため、IS学園は女子高と何ら変わりないが、そこに男が入るのだ。嫌でも視線を集める事になってしまう。

しかし、辰巳と同じ状況の男がもう一人いる。

それが原作の主人公、『織斑一夏』である。

自分のクラスである1年1組に着いた辰巳は、視線が集中したが気にする様子もなく、そのまま窓際の自分の席に座って本を取り出して読み始める。

ちなみに本は香霖堂にあったのを買った。

そうして約5分後、担任が到着した。

「1年1組の皆さん、入学おめでとうございます。私は副担任の山田真耶です。1年間よろしく願います。」

そう担任が言うにもかかわらず、全員何も言わず、俺と一夏に視線が固定されているかのように動かない。

「え、え〜っと、とりあえず自己紹介を・・・廊下側の一番前から願います。」

そうやって変な空気の中で自己紹介が始まった。

「織斑君！織斑君！」

「は……はい？何ですか？」

「あの、えっとね、廊下側の一番前から自己紹介が始まって、今織斑君の番なんだけど…」

「あ…そうですね。」

考え事をしていたらしいが、すぐに立ち上がり自己紹介をする…

「えゝ織斑一夏です……以上です。」

ガタツとまるでどこかの劇のように席から落ちる女子達。

「『ドスッ』イテエ！……って関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ馬鹿者。」

入ってきたのは目つきが鋭く、凜とした感じの女性。言わずもがな、一夏の姉である『織斑千冬』である。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で育て、使い物にするのが私の仕事だ。」

そう言った数秒後、女子が黄色い悲鳴をあげて千冬に走り寄っている。

「……………」

（全く、うるさい奴らだな……こんな調子で大丈夫なのか？）

そんなことを思いながらも、本から視線をそらさず、少し殺気を出す。

「……………おい辰巳。」

「・・・何だ織斑教諭。」

殺氣に気が付いたのか、千冬が辰巳に話しかける。

「殺氣を出すのをやめろ。」

「・・・・・・了解。」

ほんのわずかでも殺氣が出ているのに気づけたのはとてもすごいことだろう。

しかし、他に気づいた者がいないのを見ると、このクラスは武人がいないのだろう。

「そ、それじゃあ織斑君の次の人から・・・」

そして自己紹介は進んでいく。

「それじゃあ、最後に辰巳君、お願いします。」

そして辰巳の番になった。だるそうに立ち上がり、そして全体を見て喋りだす。

「辰巳だ。名字がないのは気にするな。」

それだけ言っただけで座った。全員がもつといえよ的な視線を向けるが無視。

「そ、それだけですか？」

「・・・・・・ああ。特に言う事もないだろう。」

「で、でも先生としてはもっと知りたいなあって思ってるんですが。」

「

「・・・了解。」

座ったままだるそうに話し始める。

「俺は騒がしいのが嫌いだ。それと、ISを持ってもいないのに偉そうにする女や、なんの力もないくせに偉そうにする奴らが嫌いだ。」

そして一呼吸置き、また話し出す。

「そして、俺は認めた奴以外とは話さない。それを理解しろ。」

話し終わった後、また本を読みだす。

教室内は今の言葉が強烈だったのか、全員沈黙していた。

そのままSHRが終わり、休み時間になった。

第3話 イレギュラーと妖怪（前書き）

久しぶりの投稿だけどすごく短いよ！

度重なる用事によって執筆時間がとれず・・・このような結果になりました。

本当に申し訳ありません！

次から少しずつ伸ばしていきますので、これからもよろしく願います！

第3話 イレギュラーと妖怪

休み時間

「なあ、辰巳…だったか？」

「…そうだが、何の用だ。」

前回の強烈な発言にも関わらず、辰巳に話しかけてくる人が居た。

「俺は織斑一夏、同じ男同士仲良くしようぜ。」

「……ああ。こんな所では肩身の狭い思いをするだろうからな。」

やはりIS学園の中に男が二人いると少しは気が楽になるだろう。しかしこういった感じにいると…

「一夏×辰巳…アリね！」

……というふうに腐った一部の人がいるため、また厄介になる。

「（あのパパラッチ天狗よりはマシだがな）」

そう思った辰巳が思い浮かべるのは清くも正しくもないパパラッチ天狗、「射命丸 文」。

こちらに来る前には地底まで来るようになり、面倒なことが起きていた。

その時の辰巳は、本気でキレた為、地底の一部が崩壊することく壊れたそうだ。

ちなみに辰巳はEXボスとPHボスの中間ほどの強さ。フランドールよりも多少強い位である。

そのまま世間話をしている内に、休み時間は終了した。

第4話「外」の妖怪と「中」の妖怪（前書き）

なんとなくPVとユニークを確認してみた。

p v : 5 1 4 1

ユニーク : 1 1 5 7

…え？まだ3話までしか書いてないよね？

何はともあれ、5 0 0 0 p v & 1 0 0 0 ユニークありがとうござい
ます！

これからも頑張りますので、よろしく願いします！

第4話「外」の妖怪と「中」の妖怪

キングクリムゾン。

とりあえず授業が終わった。

途中で一夏が「教科書を電話帳と間違えて捨てた」と言っていたため、辰巳が教科書を渡した。

千冬が「一週間で覚えろ」と言っていたが、一夏には無理だろう。だって一夏だもの（キリッ）

まあそんなこんなでまた休み時間。

一夏は幼馴染と思われる女子生徒と屋上へ行った。

そのため、教室に残った辰巳には視線の集中砲火。

「（…幻想郷でも似たことは多かったな）」

神として生きている辰巳は、ちよくちよく人里に行って色々手助けしている為、信仰がけっこう多い。

具体的には諏訪子と加奈子の約2倍。（正確には1・85倍）

つまり、『信仰が多い↓人里に行く↓注目的』という事である。

そんなどうでもいい事を考えていると、不意に携帯が鳴る。

表示を見ると、『非通知』となっている。

「（…誰だ？俺の携帯には篠ノ之しか入っていないし、誰にも教えていないはず…）」

取りあえず出て、誰かを確認する。

「…誰だ？」

「おお！成功した！」

電話越しに聞こえる声は、受験に受かったような感じの嬉しそうな声であった。

辰巳は、声から相手を確認すると、ため息をついて、話を始める。

「…なんだお前か。河城。」

「久しぶりだね盟友！」

河城にとり。幻想郷に住む河童の一人。

「外」から流れてきた機械を改造や製作をしている。

本人曰く、「人間とその味方は盟友だ！」ということらしい。

「…それで、何で「中」にいるお前が俺の携帯にかけられるんだ。」

「そりゃ、発明に決まってるじゃないか！博麗大結界をちよつと弄ってもらってね。繋がるようにしてもらったんだよ！」

「…そんな簡単に言う事じゃないだろ。」

脳裏に浮かんだ苦労してる九尾の式神に同情した。

「とりあえず、数人に携帯を渡しておいたから、かかってきたら登録するようにしてね。」

「…その数人とは？」

「妖怪の賢者とその式、博麗の巫女、紅魔館のメイド、フラワーマスター、閻魔様、あと覚妖怪だね。」

にとりの言った人物は、八雲紫、八雲藍、博麗霊夢、十六夜昨夜、風見幽香、四季映姫、古明地さとりである。

「…よく風見に渡せたな。」

「向こうからいきなり来て、渡せときょうh…頼んできたんだよ。」

恐らく、妖怪の山の花に聞いたのだろう。決してにとりに脅迫はしてない…うわなにをするやm『ピチューン』

「ま、一応伝えておくことはこれだけだよ。ときどきは顔を見せるようにね。」

そう言っで一方向的に電話を切られた。

それとほぼ同時に、休み時間終了のチャイムが鳴った。

第5話 小娘と怒る妖怪 (前書き)

だいたい1週間に一度は更新いたします。

最近耳の病気にかかりました。

早く治したい…

それよりも感想が欲しいと思う今日この頃。
誰からでも受け付けております。

第5話　小娘と怒る妖怪

またキングクリムゾン。

再び休み時間。

辰巳は一夏にISについて教えていた。

蛇足だが、辰巳はこの2年で大学レベルの学力を得ている。

「ここは？」

「…こっちの説明を見る。」

基本的には話すより見せた方が早いので、教え方は会話のようなものだ。

よく人里に寺子屋の臨時講師として行っていたので、そこらの教師よりも分かりやすい。

そんな感じで教えていると、近づいてくる女生徒に気が付くが、一夏に教える事を優先した。

「ちよつとよ」「ここは？」

一夏も勉強を優先したのか、完全に無視して話をしてきた。

「…これの応用だ。似たようなものだからすぐ覚えるだろう。」
「サンキュ。」

無視された事に怒っているのか、咳払いをして少し強気に

「ちよつとよろしくて？」

と、再び女生徒が話しかけてきた。

「……よろしくない。こっちは真剣にやっているんだ。邪魔をするな。」

「誰？俺は君の事を全く知らないけど。」

ほぼ同時に断った一夏と辰巳は、再び勉強を開始する。

その態度に、女生徒はプルプルと怒りを表し、机を思い切り叩いた。

「なんですのその態度は！？しかもこのわたくしを知らない！？イギリス代表候補性で入学主席のセシリア・オルコットを！？」

「……誰でもいいが、人の邪魔をするな。」

「ッ！馬鹿にしてるんですの！？」

「五月蠅いぞ、小娘。」

辰巳がそういった瞬間、世界が凍りついたかのような感覚がセシリアを襲った。

辰巳から感じる恐怖、威圧感をその身に受け、膝が震える。

しかし、セシリアのプライドがそれを抑え、反発した。

「ど、どうせろくでもない親に育てられたんでしょね。このわたくしに反抗するなんて。そっちの頭の悪い人も、親が悪ければ子も悪いでしょうね。」

「……………」

「……俺は物心ついた頃には親はいなかったよ。」

「哀れですわね！ですが、わたくしはそういった人にも手をさしのべ「馬鹿にするな」ま……」

辰巳がセシリアの方を向く。

その瞳には、誰が見てもわかるような、怒りが浮かんでいた。

「…哀れだど？俺は一人で、ずっと生き延びてきたんだ。その何処が哀れだど？」

すう、と息を吸い、一言。

「……お前の方が哀れだ。」

普段のセシリアなら、顔を真っ赤にして怒るであろう。

しかし、辰巳という目の前の恐怖と威圧感、怒りの感情に勝るものはなく、そのまま硬直してしまった。

ふと、チャイムの音が鳴る。

その音で、永遠に続くかと思うほどの恐怖から、セシリアは我に返り、

「お、覚えてなさい！」

と捨て台詞を言って、自分の席へ逃げ帰っていった。

第6話　哀れな小娘と妖怪（前書き）

リアルで時間が取れず、執筆が進みませんでした。申し訳ございません。

あと、どうでもいいけど「一夏」と打つ時に「ひとなつ」と打つのは俺だけじゃないはず。

第6話　哀れな小娘と妖怪

授業中。

IS学園では、IS以外にも通常の高校と同じ授業を行っている。

ISだけで精いっぱいという一夏だが、通常の授業の合間にISの知識を覚えようと頑張っていた。

そんな一夏を横目に、辰巳は携帯を使っていた。

もちろん授業中なのでメールだ。

幻想郷ともやりとりができるようになったため、電話やメールをし
てくる奴らがけっこう出てきた。

例えば、『貴方の家の前の花壇、花をもう少しで咲かせるわよ。』

『妹様が貴方に会いたいって駄々をこねてます。近いうちに顔を見せに来てください。』

『今度その携帯にステルスとかいろんな機能つけてあげ
よ！』等。

最後のやつには『ステルス機能なんぞいらん。使いづらいわ』と返
信した。

今打っているメールはさとりからで、『灼熱地獄跡に異常が
出ました。私たちでは直せないの、力を貸してください。』だそう
だ。

『了解。今度そちらに戻るから、その時にでも直す。あと2、3週
間待っている。』

打ち終えて、送信したとほぼ同時に、千冬が話を始めた。

「よし。今日はここまでだ。これからクラス代表を決める。推薦方式で決めるぞ。」

そう言つて、誰かいるかと聞く。

「じゃあ、織斑君を推薦します！」

「あ、私もー！」

「男のIS操縦者を広告できるし、私たちは情報を売れる。一石二鳥だね！」

「でも男なら辰巳君もいるよ？」

「うゝん、悩むな。」

クラス中から辰巳にするか一夏にするかで意見が割れている。

そのどちらかで決まると思われるが、そこに異論を唱える者がいた。

「待つてください！男がクラス代表だなんて恥ですわ！」

と、机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

「代表には実力が必要。このクラスならわたくしがトップですわ！」
と言い、次々と辰巳と一夏を罵る発言をした。

「こんな極東の島国まで来て、サーカスをするつもりなどありませんわ！」

などと発言して喚いていたが、その罵倒を向けられている二人はというと…

「辰巳、ここどうすればいい？」

「……ああ、ここはこれを使えばできる。ここも見ておけ。」

「ああ、ありがとう。」

と完全に無視して勉強に打ち込んでいた。

「返す言葉ありませんの？貧弱ですわね！やっぱり男と言うのは弱いすわね！」

セシリアはその視線を二人に向けるも、完全に無視している二人をみて、顔を真っ赤に染める。

それに気づいた辰巳は、面倒だと言いながらも体をセシリアへ向け、話を始めた。

「……君は何をしている。代表の決め方は推薦だ。君は誰にも推薦されていないだろ。」

真正面から正論で返され、セシリアは言葉に詰まった。

「……それに、日本を島国と言うならイギリスも島国だ。あと、男は女よりも腕力などの基本的な力は上だ。貧弱なのは女のほうだ。」

更に追い打ちをかけるように正論を出され、セシリアは完全に返す言葉が無くなった。

「さて、そろそろ決めるぞ。今のところは辰巳と一夏だが。誰かほかの意見はあるか？」

千冬の言葉に、一人を除く全員が賛同し、そのまま多数決になるか

と思われたが、

「織斑一夏！辰巳！あなた方に決闘を申し込みます！」

第7話　妖怪と弾幕（前書き）

リアルで忙しく、執筆出来ませんでした。申し訳ございません。

感想を下さった無零怒さん、ハンター銀さんありがとうございました！

そして初めての弾幕描写。上手くできてるかなあ…

第7話　妖怪と弾幕

セシリアの決闘宣言から3日。

一夏に特訓してくれと頼まれたが、一夏とも戦うため、情報を与える訳にはいけないため、断った。

一夏を篠ノ之（妹）が鍛えている間、辰巳はというと…

「こうして会うのは久しぶりですね、辰巳さん。」

「……妖怪は2年でも20年でもそう変わらないだろう。」

幻想郷に一旦戻っていた。もちろん授業の後でだが。

「…それで、この前言っていた灼熱地獄の不具合と言うのは何だ。」

「あ、それはペットに説明させます。…お燐、辰巳さんを連れて行って。」

古明地さとの能力は「心を読む程度の能力」だが、辰巳には能力がきかない。

なぜなら、辰巳の能力である「伸縮を操る程度の能力」で辰巳自身の周りに相手の能力の範囲を縮める領域を作り、能力がきかないようにしているからだ。

そんな感じで一週間が過ぎ、決闘の日になった。

一夏とセシリアは原作どおり、一夏が負けた。

しかし、セシリアの機体はほぼ壊れており、戦闘が不可能と判断された。

一夏も疲れて動くことがままならない。

と、いう事で辰巳の試合は延期となったが、辰巳は試合を行った。

相手は…

「一度あの馬鹿の最高傑作を壊したかったんだ。」

「…織斑教諭。そんなことしたらISS学園つぶれるぞ。」

そう。学園内の実力トップ、織斑千冬であった。

辰巳の入試の時の成績は満点。

実技は無傷。

そんな完璧超人のような辰巳だが、さすがに千冬相手では冷や汗が出る。

「…まあいい。戦うのなら、全力で相手しよう。」

『試合開始!』

アナウンスが開始を告げるとともに、千冬は高速で辰巳に切りかかる。

「……禁忌『レーヴァンティン』」

だが、辰巳の手に現れた炎の剣で防がれる。

「……禁弾『スターボウブレイク』」

辰巳が言葉を言うと同時に、周りに白い線のようなものが現れる。それは立方体となり、辰巳と千冬を閉じ込める。

「ほう…透明な壁…さしずめ結界といったところか。」

千冬は動じることもなく状況を分析し、辰巳へと再度切りかかる。が、その体は急停止せざるを得なかった。

辰巳の後ろにいきなり出現した弾幕。

1つ1つに熱源反応のある球体で作られた幕。

七色に光り輝くその幕は、見る者を圧倒する禍々しさがあった。

そして、それらは全て千冬に向かい発射された。

「チツ！…なかなか手ごわいな。」

「…QED『495年の波紋』」

次に出てきたのは青色の球。

それらは弾けるように四方八方へと飛んでいく。

最初は少ない数だったが、次々と弾ける球が多くなっていく。

水面に写る波紋のように、次々と広がっていく弾に、千冬はよけ続けるしかなかった。

やがてそれらは消えていった。しかし、辰巳の姿がなかった。

「……………」

ハイパーセンサーにも反応せず、何処にも見当たらない。そんな相手に千冬が取った行動は、目を閉じ、音を聞き、敵を見つける。

だが、それが裏目に出た。

目を閉じていたために、前方の球に気づかなかった。

「……………秘弾『そしてだれもいなくなるか?』」

声に反応し、千冬が目を開けた時にはもう遅い。

大量の弾に囲まれ、身動きが取れなくなっていた。

「……………降参する。私の負けだ。」

第8話〜妖怪と禁止と白黒〜（前書き）

どうも。授業中にネタを考えている作者です。

投稿する前にPVとユニークを確認した所…

PV13000、ユニーク3000を突破していました！
こんなに多くの方に見ていただき、とてもうれしいです！
10万PV目指して頑張ります！

第8話　妖怪と禁止と白黒

織斑千冬との戦いの次の日。

「辰巳はIS学園においての全ての大会、対抗戦への出場を禁止する。」

朝のHRに静寂が訪れる。

その後、茫然とする者、ひそひそと話をする者が出始めた。そんな中、口を開いたのは、言われた本人である辰巳だった。

「……織斑教諭。いきなりそれと言っても意味がないと思うぞ。」
「……そうか。では順を追って説明する。」

「……おい辰巳。あの機体の戦闘力は何だ？」

試合を終えた千冬が辰巳を軽く睨みながら聞いた。

「どう考えてもあれは『人』の限界を超えている。大量のエネルギー弾を出すだけでも精一杯だろうに、全てを動かしながら自分も動くなど私や教師でも無理だ。」

「……別に、ただ俺が異常なだけだろう。」

その視線に目をそらさず、じっと見つめ返すようにして答える。

「お前の入学時のデータは平均男性の多少上の運動能力、知能も同

じ程度だった。そんな奴があんな芸当が出来るはずないだろう。」

「……もし、俺が実力を隠してると言ったらどうする。」

「ISの起動、戦闘に関する事は先ほどの戦闘で理解した。大方束のマッドな考えのせいだろうがな。」

これ以上を聞き出すのは無理と判断した千冬は、視線を外し、アリナを立ち去って行った。

~~~~~

「……という訳で、辰巳は私よりも強い。すなわち、学園最強であり、世界最強と言っても過言ではないISの所有者だ。」

説明を終えた千冬は、クラス全体を見まわし、声のトーンを下げて言った。

「……辰巳に対する戦闘は、たとえ訓練であつても危険だ。決して戦おうなんて考えるな。いいな？」

「「「「「は、はい！」「」「」」」」

そんな感じで、IS学園にはこのような噂が流れるようになった。

「学園の女子を暴力で従えている。」

「教師にさえ恐喝や暴力を平気で行える立場である。」

「人外」

最後以外は完全に尾ひれがついているが、いくらなんでも膨張しす

ぎだと言い、学園側の教師が全面否定したが、かえって煽る結果となってしまった。

クラス対抗戦に辰巳が出場禁止となった為、自動的に一夏が代表となった。

そのことを聞いた一夏は、茫然とし、千冬に文句を言って出席簿での制裁を喰らったそうだ。

幻想郷に異変が起きたことを辰巳が知るのは、代表が決定した数日後、3時間目の授業中の事だった。

授業中の静かな教室に、廊下からの誰かが走っている音が聞こえた。千冬は少し待っていると言い、廊下へ出て行った。

それと入れ替わりになるように、教室の後ろ側のドアが開いた。

「おい辰巳!」

そう言い、教室に入ってきたのは魔女のような格好をし、箒を持った金髪の女性だった。

「…なぜお前がここにいる。霧雨。」

名を霧雨魔理沙。自称「普通の魔法使い」。幻想郷の魔法の森に住む「人間」である。

「人間」と「魔法使い」は種族としては別の扱いをしている。

「そんな事言ってる場合じゃないんだ！博麗神社が潰れたんだ！」

「…そうか。お賽銭が無くなり、ついに建物を取り壊したのか。」

「違う！神社自体が壊れたんだ！このままだと博麗大結界が壊れちゃう！」

博麗神社が壊れる。すなわち、幻想郷を「隠して」いる結界が不安定になるという事だ。

小さな歪みなら大丈夫だが、要の神社が壊れるとなると、その歪みは冗談では済まない。

下手をすると、幻想郷が消えてしまう可能性だってありうる。

「…霧雨。すぐに幻想郷へ行くぞ。」

「わかった！ちょっと待ってるんだぜ……」

霧雨が帽子から札を取り出し、何やらぶつぶつと唱え始める。すると、何もない空間に大きな穴が出来た。

「よし！これに入るんだぜ！」

「…行くぞ。」

## 第8話く妖怪と禁止と白黒く（後書き）

次回から緋想天へと入ります。

東方キャラの書き分けて難しいね…なんせ公式の本が1冊しか持っていないものww

感想、レビューなどお待ちしております。

キヤーイクサーン！

閑話〱地靈殿EX2〱（前書き）

すいません！スランプとテスト勉強のせいで全く執筆できず…遅れてしまいました。申し訳ありません！！

今回は閑話として霊夢と辰巳の弾幕〱〱〱をどうぞ。

## 閑話〱地霊殿EX2〱

地霊殿から飛ぶこと数十分。鬼の町を大きく離れ、入り組んだ岩と岩の間を滑るように飛ぶ。

小明地こいしに言われ、地底を飛行する霊夢。

若干の不信感を抱えつつも、危なげなく岩の道を抜けた。その先には、地底とは思えない程明るく、草木が生い茂っていた。

そんな中に、たった一軒。まるで神社のような建物が建っていた。

その建物のそばで、咲いている花に水をやっている男が居た。

「貴方が…妖怪神？」

霊夢の声に気付いたのか、男は振り向き、

「…そうだが、何か用か？……博麗の巫女。」

と言った。

ただそれだけ、当たり前前の行動のように見えるが、霊夢は先手を出せるように身構えた。

「へえ。地底の神が、地上の巫女を知ってるなんてね。」

「……紫から話は聞いている。」

「紫から？へえ、あいつ友人が居たの。」

他人から見ればただの談笑だが、本人たちは全く別であった。

探り合い、相手の出方を窺<sup>うかが</sup>う。

男が袖から札を八枚取り出した。

霊夢は札を警戒し、札を取り出し、お祓い棒を構える。

男が札を投げると、地面と空に四枚ずつ飛び、透明な立方体を作った。

「やるぞ。博麗の巫女。」

「…どうして幻想郷に居る奴は…こつも血の氣が多いのかしら。」

二人は20m程の距離を取り、スペルカードを構えた。

「…そういえば名乗ってなかったな。」

スペルカードを何枚か懐に入れ、向き直った男が言った。

「あ、そういえば私も。」

「…始めようか。」

地面から10mほど飛び、男が言う。

霊夢も同じくらいまで飛び、お祓い棒を構え言う。

「…博麗の巫女。博麗霊夢」

「…妖怪神。蛇帯の辰巳。」

「「…参る!!」」

~~~~~

初めはお互いスペルカードを使用せず、ただの弾幕で戦う。

霊夢はお札の赤と霊力での青白い弾幕を張る。

それに対し、辰巳は妖力と神力、霊力も織り交ぜた色鮮やかな弾幕を張る。

実力はほぼ互角。けっして数を減らすことも、大きさを変えることもなく、ただひたすら撃ち合う。

そんな中、先に動いたのは辰巳だった。

「摂理『人妖合戦』」

スペルカードを発動し、霊夢の眼前には緑色の大玉、小玉が出現した。

しかしそれだけではなく、背後には赤色の大玉、小玉が存在していた。

辰巳が手を振ると、赤、緑の玉がばらけ、一斉にぶつかり合う。

ある玉は逸れ、またある玉は打ち消しあい、また復活する。

霊夢はそれを紙一重で次々と避けていく。

よけ始めて数十秒。突然玉の軌道が変わった。

緑と赤の間に入るように、黄色の弾幕が入ってきた。

黄色に触れた弾幕は止まり、完全にランダムに動き始める。

速度も、向きも、完全にバラバラになった。

しかし、その量は膨大であり、とても避けきるのは難しい。

「霊符『夢想封印』！」

霊夢はスペルカードを宣言し、夢想封印を放つ。

その玉は相手の弾幕を飲み込み、辰巳に向かって撃ちだされた。

しかし、一向に辰巳は動かない。

まるで玉が『届かない』かのように『進んで』いるからだ。

「へえ。あの死神みたいな能力ね。玉を届かなくするなんて。」

二人のスペルカードの時間が切れ、スペルブレイクとなった。

「…対符『天地』」

辰巳が次のスペルを宣言した。

するとレーザーが雨のように降ってきた。

それだけではなく、横や下からもレーザーが来る。

それは霊夢を囲むように広がり、辰巳を見えなくした。

特に動くことなく少しの移動でレーザーを避けていく霊夢。

その背後から大玉がいくつか飛んできた。

それに気付き、紙一重で避ける。

しかし、その大玉はどんどん増えていく。

前から、背後から、上から、下から。

どんどん速くなり、また数も増える。

それに対応しきれず、1発被弾してしまった霊夢。

しかし、それだけでは終わらず、囲んでいたレーザーまでもが襲い掛かる。

被弾はしないが、かなり大きな動きをして避ける。

やがて時間が来たのか、弾幕が消える。

「…現想『表裏裏表』」

3枚目を宣言した辰巳。

そのスペルは、ただの弾幕とは違い、ただ『魅せる』為の弾幕だった。

虹色の太玉、小玉、レーザーが霊夢に向かって動き出す。

迫りくるのは『弾幕』。

一つ一つが美しく、儚く消える。

消えてしまふのが惜しい。

ただ『戦う』のではなく、『魅せる』のが弾幕だった。

それに忠実に従った中では、最高の出来であろう。

そんな考えを霊夢はしていた。

無意識に、動きが止まる。

そのまま、霊夢は弾幕に飲まれていった。

~~~~~

数日後…博麗神社にて

「さあ全員飲め！宴だ宴！」

まだ昼だというのに、幻想郷中の妖怪達が集まり、宴会を開いていた。

その中には、さとりや辰巳の姿もあった。

「…賑やかですね。」

「…ああ。」

「ほらほら何やってんだいあんたら！辛気臭い雰囲気出してんじゃないよ！」

「…もう酔っぱらっているのか、星熊。」

「ゆゝぎゝ！…こっちなよゝ！」

「お、萃香！久しぶりに飲み比べでもしようか！」

「いいねゝそこの新顔も来い！」

「…え？私ですか？」

「ああそつさ！早くやるぞ！」

「え、ちょっと待っ…「ほら行くぞ！」……」

「…」愁傷様。」

~~~~~

4時間後・・・

「…これは酷いな…」

辰巳の目の前に広がるのは、酔っ払い一升瓶を抱えて寝ている妖怪達であった。

「……」

その妖怪たちを無視し、神社の鳥居の上に座り、ほんの少し酒を飲む。

「…」一緒にてもよろしくて？」

真横にスキマが開き、紫が出てくる。

「…構わない。」

「どうも。」

同じように鳥居の上に座り、一升瓶を取り出した。

「……どうかしら？私の幻想郷は。」

「…ある意味、もう十分だな。」

「あら？それはどついう意味かしら？」

「…共存というより、妖怪が人間に近くなった。」

「……ええ。しかしこれも一種の共存でしょう？」

「…全く。お前らしいな。その捻くれた考えは。」

酒を一気に飲み、杯に酒を注ぎ、紫の前へ差し出す。

紫も同じように酒を注いで、杯を出す。

「乾杯。」

第9話〜妖怪と面倒事と天子と…（前書き）

緋想天則はさら々と戦闘無しでお送りいたします。

今更だが、書き分け難すぎるww

あと、評価ポイント100、pv20000、ユニーク4000突破いたしました。

見てくださった皆さんに伝えきれぬほどの感謝を。

第9話　妖怪と面倒事と天子と……

魔理沙の札によって幻想郷へ戻ってきた辰巳が目にしたのは、既にガレキの山となっている博麗神社であった。

「……これは酷いな。」

「霊夢は今異変の首謀者の所に行っている筈だぜ。」

「……ああ、分かった。」

辰巳は博麗神社の周りに札を放ち、何かを調べ始めた。

札はガレキの山の周りを何度も回り、辰巳の元へと戻る。

「……………」

「どうだ？ 結界の様子は？」

「……特に大きい異常は無いが……………これからどうなるかまでは……………」

「そうか……生憎だが、私は家に戻らせてもらっぜ。」

「……分かった。ご苦労。」

魔理沙は箒に跨り、森の方へ飛んで行った。

その後、辰巳は空へと飛び立った。

~~~~~  
~~~~~

飛び始めて約20分。雲を突き抜け、太陽の照りつける青空が見えてきた。

しかし、その中に一つだけ、逆光により影が生み出されている地点があった。

雲の上な為、これよりも上にあるものと言えば太陽と空のみである。

しかし、それは雲や太陽でも、ましてや隕石でもない。

ただの巨大な岩。その周りに注連縄のような物が巻き付いている。

しかし、その大きさは並外れており、辰巳が近づくに連れてどんどん大きく見える。

目視で直径約600m。

その上には、一つの小さい山と、その頂上にある剣、そして剣を持つて霊夢と相対している青い髪の少女が居た。

霊夢と少女は、弾幕ごっこではなく、格闘戦をしていた。

「でりゃあっ！」

少女が剣を横に薙ぎ払い、霊夢がそれを避けて後ろに下がる。

「…珍しいな。弾幕ではなく格闘とは。」

「あら？辰巳さんじゃない。帰ってたの？」

霊夢が振り返り、岩の上へ降りた辰巳を見る。

「…そつちの少女が首謀者か。」

「…あんた、誰よ？」

辰巳は札を何枚に取り出し、袖に仕舞う。

「…辰巳。妖怪であり神でもある。」

「ふん。あんたみたいな男が神ねえ……まあいいわ。私は比那名居ひななめ天子よ。」

訝しげな表情をしながらも天子は下段に構え直し、警戒を怠らない。

「で、わざわざこんな所まで来た理由はなによ？」

「…お前のせいでかなり面倒なことが起こりそうになった。」

辰巳はため息をつき、うんざりとした表情で話し出す。

「…1つ目。博麗神社の崩壊。下手すれば幻想郷が外に知られる。
2つ目。言わずもがな異変を起こしたこと。」

3つ目。俺がわざわざ出向く羽目になった事。俺は外に居たが、戻ってきた。」

「……え？私、そんなヤバイ事してたの？」

辰巳の言葉の意味を知り、天子は顔を青くした。

「……ああ。博麗神社は結界の最重要施設だ……今回はまだ良かったが……」

「な、なんだ……何もないなら別にいいじゃない。」

「……だが、結界に小さいが綻びや穴が出来ていた。外にバレてないかは分からない。」

天子はその言葉を聞き、膝から崩れ落ちた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

何度もごめんなさいと呟き、綺麗な土下座を決め、霊夢に一言。

「蹴ってください。」

と、変態のような発言をした。

「嫌よ。」

霊夢は間髪入れずに断り、弾幕を作り出した。

「……」

辰巳も同じように弾幕を作り、拳に神力を込める。

そして思いっきり振りかぶり、二人で同時に天子の顔面に打ち込む。

弾幕のおまけを付けて。

その数分後、天子は意識を失った。

光悦の表情を浮かべながら…

~~~~~

深夜の10時頃。

博麗神社は幻想郷の妖怪の能力をフルに使い、なんとか立て直した。

結界はかなりの広さの為、後日博麗神社以外を調べて、最後に神社周辺を直すという方針をとった。

そついった面倒なことが終わり、宴会が神社にて行われていた。

天子は幽香に罵られ、辰巳はフランやこいし達と戯れ、また幻想郷に平和が訪れた…



## 第10話〈結界と早苗と妖怪〉（前書き）

幻想郷はさつさと終わらせてISへと戻ります。

最近1週間更新を心掛けております。なかなか難しいですがね…

あと、感想をくれたsuzuki00さん、紹介が遅れて申し訳ございません。

## 第10話　結界と早苗と妖怪

異変が終わり一週間。

結界の修復中に、とある事件が起きた。

「…」

「…」

「…」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

辰巳の目の前には、山の上にある大きな『青空』。

普通、山の上には普通に空しかない。しかし、そこには大きな穴ができていて、そこにはまた別の空が広がっていた。

穴の中の空には、黒い物体が遠くに見える。

その場にいるのは、辰巳、八雲紫、風見幽香、そして河城にとりであつた。

こうなつた理由はつい十分程前。

辰巳は博麗神社にて結界の応急修理をしていた。

そして一区切りついて八雲紫に伝えようとその場所を一旦離れた。

そのすぐ後、妖怪の山から黒い『人』が現れ、結界に激突。

そのまま結界を破り、その外へと飛んで行った。

戻ってきた辰巳と紫、そして偶々博麗神社に来た幽香と、青い顔を  
したにとりが鉢合せし、にとりが土下座。

そしてこの状態が出来上がったのだ。

「…まずいわね。」

「…ええ。」

「…おそらく外はIS学園…もしくはその付近だろう。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「もういいわ。それより、どうして貴女が『コア』を持ってたのか。  
それを聞きたいわ。」

「はい…いつもどおり工房にいたら…いきなり天井を破って…あれ  
が落ちてきたんです…」

「…あいつならやりかねん。」

「…ええ。それよりも…」

「あれ、どうするかが問題よ。」

全員が見る方向には、もう見えなくなった黒い人……。『IS』が開けた結界の穴があった。

「あれには…早苗が…」

「…まずいわね…彼女なら……。やりかねない…」

東風谷早苗。外から幻想郷に移住した現神人である。

好きなものはロボットだそうだが…普通にISがある世界になったので、彼女はとても嘆いてるそうだ。

彼女がISに乗ったら、片っ端から他のISに戦いを挑むであろう。

「…仕方ない。俺が行こ…私も行くわ。」…幽香？」

「だって…面白そうだから…」

「…お前を楽しませられる奴に心当たりが無い。」

「じゃあ私が探すわ。それに外の世界の花を見てみたいのよ。」

「…どうでもいいけど、早くしてくれないかしら。結界が修復出来ないじゃない。」

「…分かった。あまり暴れすぎるなよ。」

「…わ、私も連れて行ってください！早苗に謝らないと…」

「…分かった。」

このようなやり取りが行われ、行くのは辰巳と幽香、そしてにとりとなった。

その頃、早苗はと言うと…

「あはははははははははは！…これですよこれ！正にロボットですよ！」

かなりのスピードで空を飛んでいた。

「ん？あれは……」

早苗が見る方向にはアリーナにいる二つのIS。

「………ついに敵の登場ですか！張り切っていきましょー！」

早苗は盛大な勘違いをし、アリーナに突っ込んでいった…

## 第10話 結界と早苗と妖怪 (後書き)

感想、誤字脱字報告等いつでも受け付けております。気軽にどうぞ。

## 第11話 人間と不幸と博打 (前書き)

一夏の視点で書いてみた。

でもさすがに無理があつたかもしれないww

## 第11話 人間と不幸と博打

「おい！なんだよこいつは！」

「あたしに聞かれても分かるはずないでしょ！」

俺、「織斑一夏」は、目の前に居る黒いISに戸惑っていた。

幼馴染の凰鈴音フアザンインと戦っていた時に、そいつはいきなりアリーナのシールドをぶち破ってきた。

ああもうなんなんだよ！

鈴音は約束覚えてたのに怒られるし、なんかよく分からない展開になっ  
てきてるし、辰巳は行方不明のままだし！

「ああもう……不幸だ……！！！！！」

「いきなり何叫んでるのよあんたは！」

「うるせえ！もう面倒事に関わりたくないんだよ！」

「じゃああんたがもつとしっかりすれば良いじゃない！」

「それが出来たらとっくにやってるよ！」

そんな言い合いをしている内にも、ISからの攻撃は続いている。  
全身装甲のISでは、相手の顔どころか、声すらも分からない。  
謎ばかりが深まるが、それどころではない。

「うお！つと！あぶね！」

「ああもう！ただ暴れてるだけじゃない！」

相手のISの装備は見えない。

しかし、その周りから光弾がかなりの量出てきている。

アサルトライフルどころか、マシンガンすら比にならない。

イクニッション・ブースト

瞬時加速なんて使えるはずがない。使ったら自爆する。

じゃあどうする？

俺の装備は『雪片』だけだし、あいつの装備は青竜刀と「龍砲」のみ。

しかも、エネルギーはほとんど残ってない。

終わった。勝てる要素が見当たらない。

唯一の望みは、教師陣による救出。

しかし、そんな時間はない。来るまでに二人とも墜落してしまうだろう。

なら、特攻は？

無謀すぎる。あの弾幕は掻い潜れない。きっと特攻してもすぐに撃墜する。

あの全方向に放たれている弾幕は、避けることはできないだろう。

.....

「ねえ、一夏……」

「何だ？」

「あの光弾……あまりエネルギーは削られないみたいよ。」

「え？」

「さっきら発ぐらい当たったけど、それでも20ぐらいしか減って  
いなかったわ。」

「それ、本当か？」

「なによ？こんな時に嘘なんかついてどうするのよ。」

.....勝てる。

一つだけ勝てる道がある。

しかし、ほぼ賭けだ、しかも1度きり。

ここでダメだったら？

二人とも撃墜したら？

そんな不安が脳裏をよぎる。

だけど、やるしかない。

「鈴。」

「何？」

「勝てる方法を今から教える。」

「はあ！？こんな状況で勝てる方法があるって言つの！？」

間を少し開け、鈴を真っ直ぐに見つめて言う。

「  
∴ 賭けに、乗ってくれないか。  
」

## 第11話 人間と不幸と博打 (後書き)

誤字、脱字報告、感想はいつでもお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6754v/>

---

東方飛翔機～幻想の神が現代入り？～

2011年12月20日21時51分発行